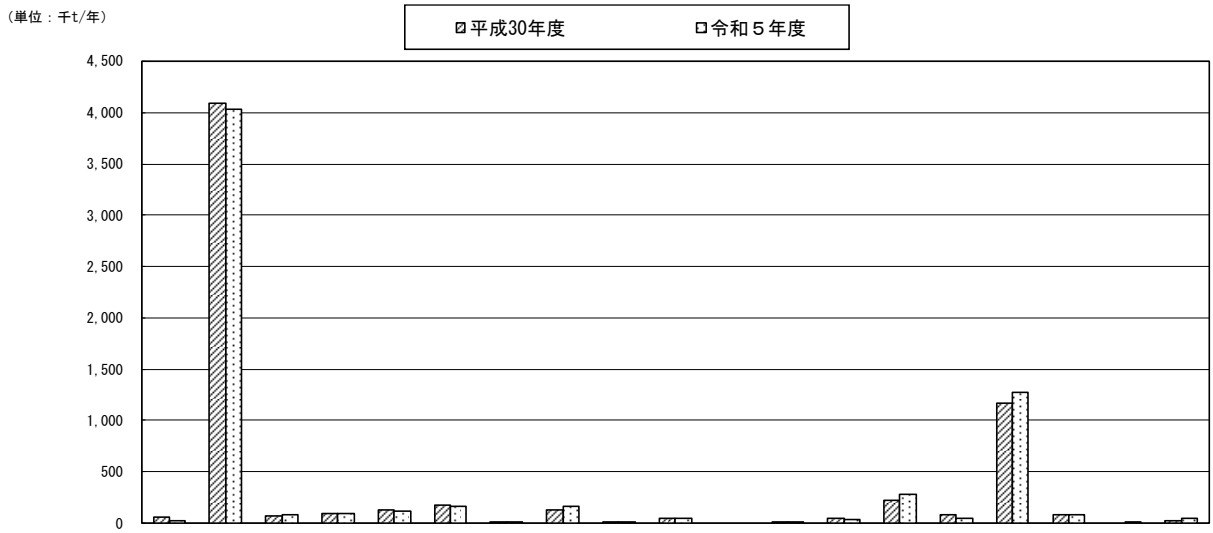
第３章　産業廃棄物発生量等の比較と将来の見込み

第１節　前回調査との比較

１．排出状況の比較

排出量を前回調査（平成 30 年度）と比較すると、図 3-1-1～2 に示すとおりである。この 5 年間で、排出量は 1.5％増加している。

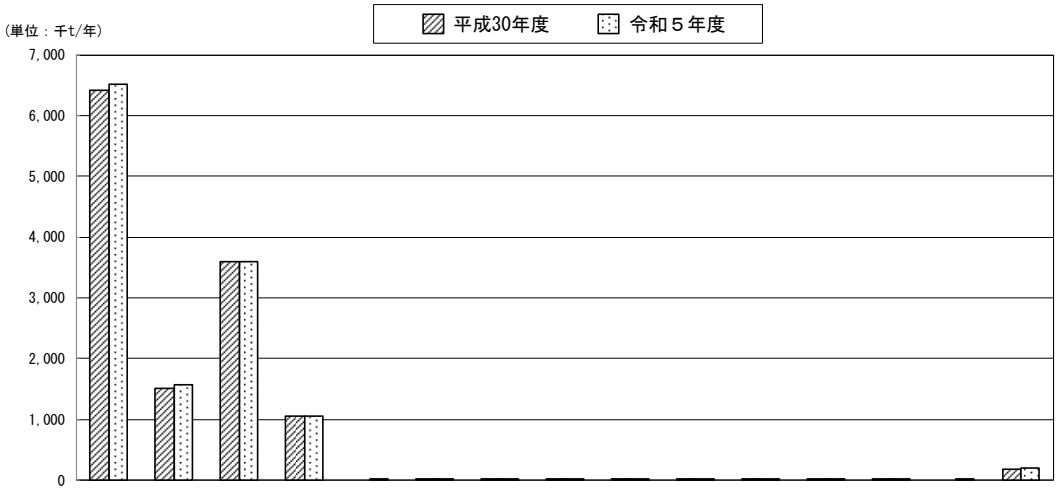
種類別に見ると、がれき類の増加が影響している。



種類：変換（千t/年）	合計	燃え殻	汚泥	廃油	廃酸	廃アルカリ	廃プラスチック類	紙くず	木くず	繊維くず	動植物性残さ	動物系固形不要物	ゴムくず	金属くず	ガラス陶磁器くず	鉱さい	がれき類	ばいじん	水銀廃棄物	その他産業廃棄物
平成30年度	6,416	56	4,097	65	96	131	177	8	128	1	42		1	45	221	80	1,165	86		18
	(100%)	(1%)	(64%)	(1%)	(1%)	(2%)	(3%)	(0%)	(2%)	(0%)	(1%)		(0%)	(1%)	(3%)	(1%)	(18%)	(1%)		(0%)
令和5年度	6,511	23	4,032	82	95	119	167	4	167	2	41		5	38	285	49	1,278	81	0	44
	(100%)	(0%)	(62%)	(1%)	(1%)	(2%)	(3%)	(0%)	(3%)	(0%)	(1%)		(0%)	(1%)	(4%)	(1%)	(20%)	(1%)	(0%)	(1%)
増減量	95	−33	−65	17	−1	−12	−10	−4	39		−1		4	−7	64	−31	113	−5	0	26
増減率(%)	1.5	−58.5	−1.6	25.6	−1.4	−9.2	−5.5	−50.7	30.3	78.7	−2.8	―	367.8	−16.6	28.8	−39.0	9.7	−5.3	100.0	143.4

図 3-1-1　種類別排出量の比較

業種別に見ると、建設業の増加の影響が大きい。

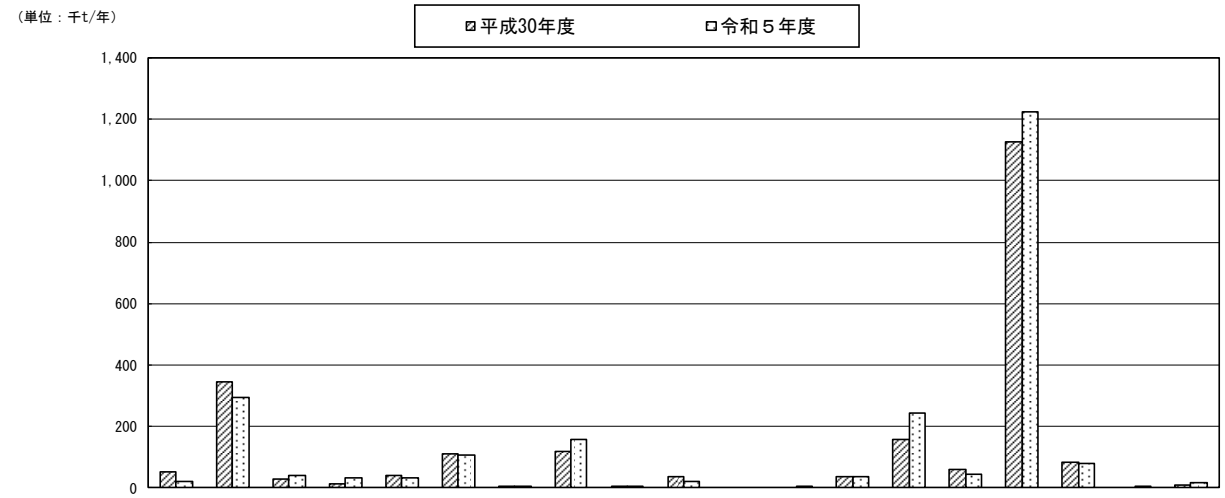


業種（千t/年）	合計	建設業	製造業	電気・水道業	情報通信業	運輸業	卸・小売業	物品賃貸業	学術・開発	宿泊・飲食	生活関連業	教育・学習支援	医療・福祉	複合サービス業	サービス業
平成30年度	6,416	1,515	3,593	1,055	0	13	25	3	4	11	5	10	9	0	171
	(100%)	(23.6%)	(56.0%)	(16.4%)	(―)	(0.2%)	(0.4%)	(0.0%)	(0.1%)	(0.2%)	(0.1%)	(0.2%)	(0.1%)	(―)	(2.7%)
令和5年度	6,511	1,561	3,600	1,055	0	8	25	5	20	9	6	6	24	0	189
	(100%)	(24.0%)	(55.3%)	(16.2%)	(0.0%)	(0.1%)	(0.4%)	(0.1%)	(0.3%)	(0.1%)	(0.1%)	(0.1%)	(0.4%)	(0.0%)	(2.9%)
増減量	95	46	7	0	0	−5	0	2	16	−2	1	−4	15	0	18
増減率(%)	1.5	3.0	0.2	0.0	―	−35.9	0.3	64.3	409.0	−15.0	22.0	−38.6	164.0	―	10.8

図 3-1-2　業種別排出量の比較

２．再生利用量の比較

再生利用量を前回調査（平成 30 年度）と比較すると、図 3-1-3 に示すとおりである。この 5 年間で、再生利用量は 139 千トン、6.2%増加している。また、再生利用率は平成 30 年度の 34.7%から令和 5 年度は 36.4%と 1.7%増加している。

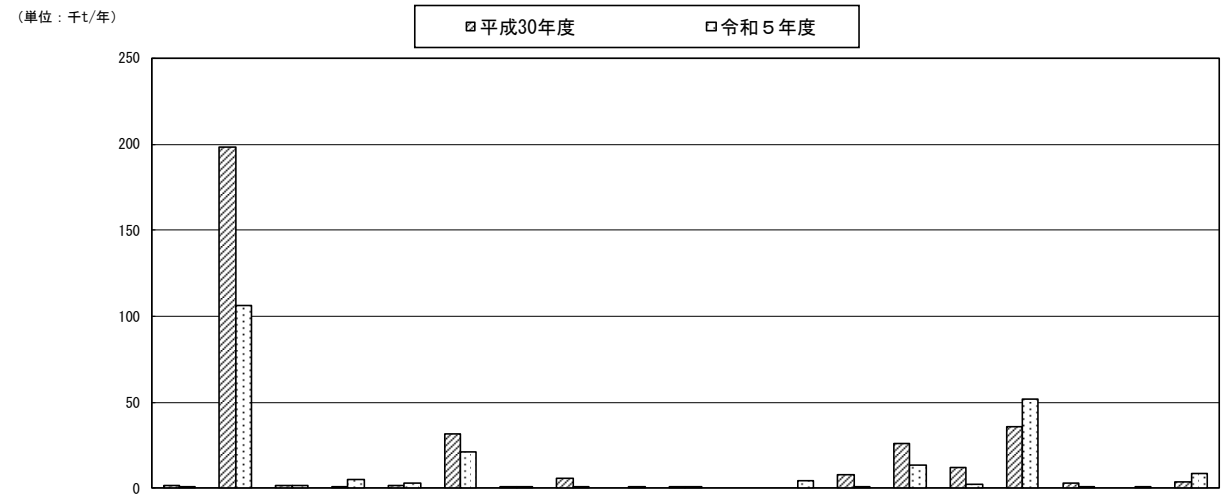


種類：無変換（千t/年）	合計	燃え殻	汚泥	廃油	廃酸	廃アルカリ	廃ﾌﾟﾗｽﾁｯｸ類	紙くず	木くず	繊維くず	動植物性残さ	動物系固形不要物	ゴムくず	金属くず	ｶﾞﾗｽ陶磁器くず	鉱さい	がれき類	ばいじん	水銀廃棄物	その他産業廃棄物
平成30年度	2,228 (100%)	53 (2%)	345 (15%)	29 (1%)	14 (1%)	39 (2%)	112 (5%)	7 (0%)	118 (5%)	1 (0%)	35 (2%)			37 (2%)	159 (7%)	60 (3%)	1,128 (51%)	82 (4%)		8 (0%)
令和5年度	2,367 (100%)	23 (1%)	295 (12%)	39 (2%)	31 (1%)	33 (1%)	108 (5%)	4 (0%)	159 (7%)	2 (0%)	20 (1%)		0 (0%)	37 (2%)	244 (10%)	46 (2%)	1,226 (52%)	81 (3%)	0 (0%)	18 (1%)
増減量	139	−30	−50	10	17	−6	−4	−3	41		−15		0	0	85	−14	98	−1	0	10
増減率(%)	6.2	−57.1	−14.4	34.5	122.5	−15.5	−3.1	−46.8	34.9	58.5	−42.4	−	−	−0.4	53.6	−22.8	8.7	−0.9	100.0	123.9

図 3-1-3　種類別再生利用量の比較「種類別：無変換」

３．最終処分量の比較

最終処分量を前回調査（平成 30 年度）と比較すると、図 3-1-4 に示すとおりである。この 5 年間で、最終処分量は 112 千トン、33.4%減少している。また、最終処分率も平成 30 年度の 5.2%から令和 5 年度は 3.4%と 1.8%減少している。



種類：無変換（千t/年）	合計	燃え殻	汚泥	廃油	廃酸	廃アルカリ	廃ﾌﾟﾗｽﾁｯｸ類	紙くず	木くず	繊維くず	動植物性残さ	動物系固形不要物	ゴムくず	金属くず	ｶﾞﾗｽ陶磁器くず	鉱さい	がれき類	ばいじん	水銀廃棄物	その他産業廃棄物
平成30年度	334 (100%)	2 (1%)	198 (59%)	2 (1%)	1 (0%)	2 (1%)	32 (10%)	1 (0%)	6 (2%)		1 (0%)			8 (2%)	26 (8%)	12 (4%)	36 (11%)	3 (1%)		4 (1%)
令和5年度	222 (100%)	0 (0%)	106 (48%)	2 (1%)	5 (2%)	3 (1%)	21 (10%)	0 (0%)	1 (0%)	0 (0%)	0 (0%)		5 (2%)	1 (0%)	14 (6%)	3 (1%)	52 (23%)	0 (0%)	0 (0%)	9 (4%)
増減量	−112	−2	−92	0	4	1	−11	−1	−5		−1		5	−7	−12	−9	16	−3	0	5
増減率(%)	−33.4	−85.4	−46.3	−3.8	443.3	55.4	−33.8	−82.5	−83.6	−	−64.8	−	−	−91.5	−47.9	−79.0	44.5	−93.6	100.0	117.8

図 3-1-4　種類別最終処分量の比較「種類別：無変換」

４．処理状況の比較

処理状況を前回調査（平成 30 年度）と比較すると、表 3-1-1、図 3-1-5 に示すとおりである。

表 3-1-1　処理状況の比較

（単位：千ｔ/年）

項　目		平成30年度			令和５年度			増減量	増減率(%)
発生量		6,636	100.0%	―	6,890	100.0%	―	254	3.8%
有償物量		220	3.3%	―	379	5.5%	―	159	72.3%
排出量		6,416	96.7%	100.0%	6,511	94.5%	100.0%	95	1.5%
	再生利用量	2,228	33.6%	34.7%	2,367	34.4%	36.4%	139	6.2%
	減量化量	3,854	58.1%	60.1%	3,921	56.9%	60.2%	67	1.7%
	最終処分量	334	5.0%	5.2%	222	3.2%	3.4%	-112	-33.5%
	その他量	0	0.0%	0.0%	0	0.0%	0.0%	―	―

注）表中の％表示については、四捨五入しているため、総数と個々の数値の合計が一致しないものがある。

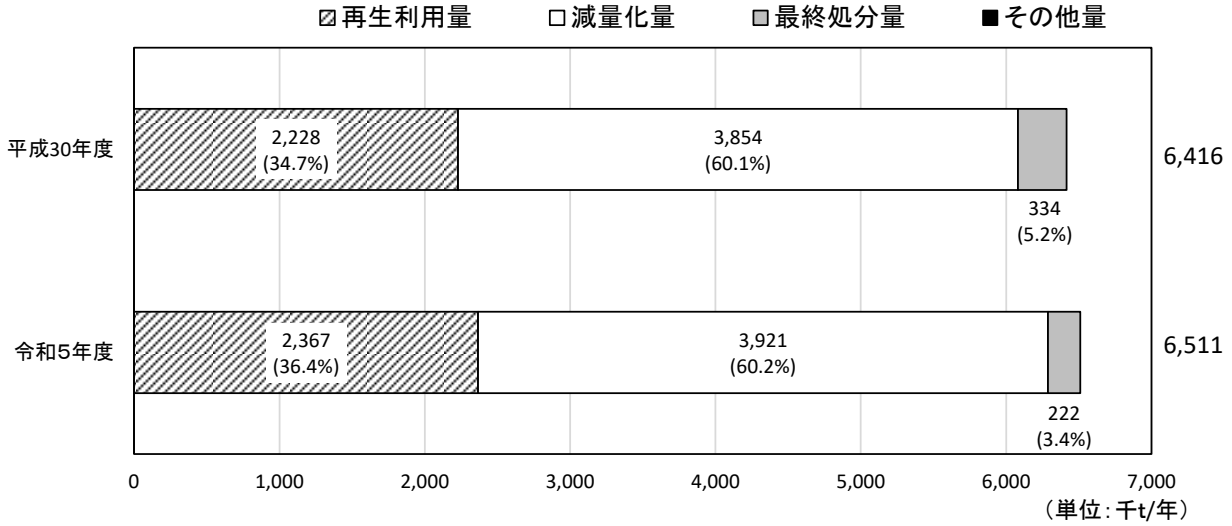


図 3-1-5　処理・処分状況の比較

第２節　将来の見込み

１．将来予測の方法

産業廃棄物量の将来予測にあたっては、今後とも「大きな技術革新及び法律上の産業廃棄物の分類に変更がなく、現時点における産業廃棄物の排出状況等と業種ごとの活動量指標との関係は変わらない」ものと仮定して、調査した業種別の母集団（調査対象全体）における将来の活動量指標を用いたＣ式によって予測することを原則とした。

W’：　調査当該年度の推計産業廃棄物量
O”：　将来年度の母集団の活動量指標
O’：　調査当該年度の母集団の活動量指標

C　　$W'' = \frac{O''}{O'} \times W'$：　将来年度の予測産業廃棄物量

将来の活動量指標（O”）の予測は、過去の活動量指標の動向（トレンド）に対して、過小あるいは過大な予測をできるだけ避けるために、数種類の回帰式（直線、指数曲線、自然対数曲線、ロジスティック曲線）を当てはめる時系列解析を行った。推計結果で最も傾きの小さい値、もしくは過去の実績から最も妥当と判断される回帰式による結果を採用した。

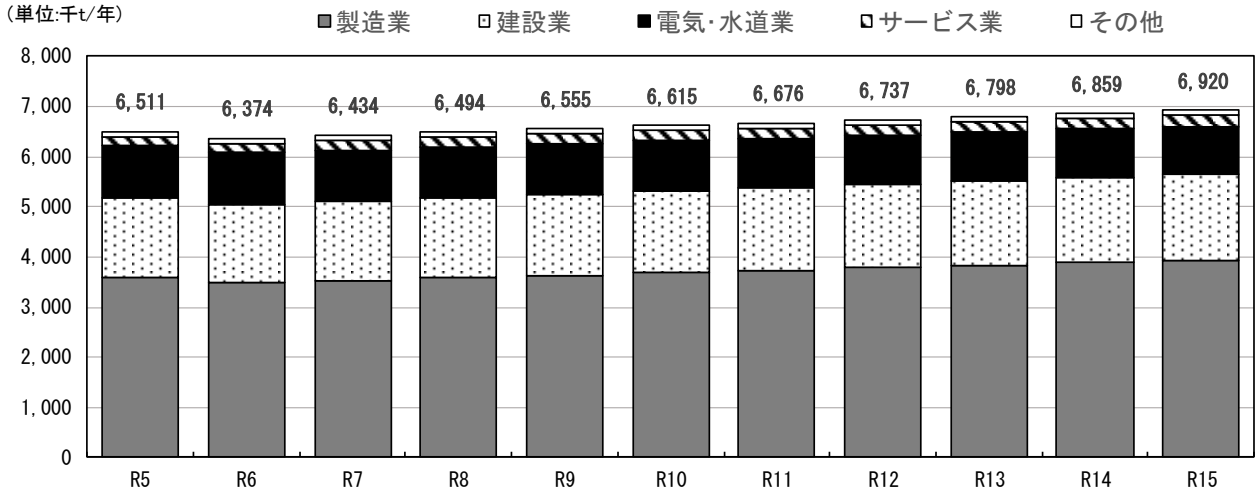
①直線回帰式	【　$y = ax + b$　】
②指数回帰式	【　$y = abx$　】
③自然対数回帰式	【　$y = a \log x + b$　】
④ロジスティック回帰式	【　$y = K/(1 + ea - bx)$　】

各業種の指標値は表 3-2-1 のとおりである。

表 3-2-1　活動量指標値の出典

業　種	活動量指標値	指標値の出典
建設業	元請完成工事高	「建設工事施工統計調査報告書」（H25～R4）
製造業	製造品出荷額等	「工業統計調査報告」（H25～R2） 「経済構造実態調査」（R3～R4）
電気・水道業	将来推計人口の伸び率	「日本の地域別将来推計人口」 （令和５年（2023）年推計）
医療・福祉（病院）	病床数	「医療施設(動態)調査_都道府県別」（H24～R5）
その他	従業者数	「経済センサス基礎調査、活動量調査」 （H24、H26、H28、R3）

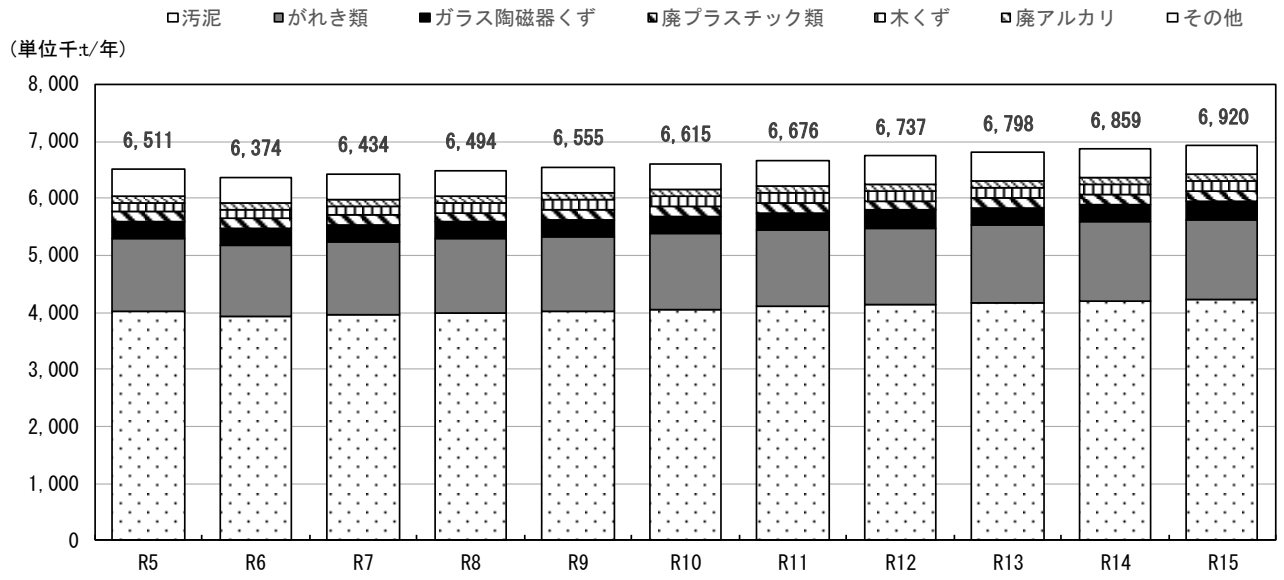
その結果、排出量は増加する予測となり、全体でみると令和 10 年度が 6,615 千ﾄﾝ（令和５年度比 1.6%増）、令和 15 年度が 6,920 千ﾄﾝ（令和５年度比 6.3%増）となっている。業種別にみると、製造業と建設業が増加し、電気・水道業は減少している。



（単位：千t/年）

種類＼年度	R5	R6	R7	R8	R9	R10	R11	R12	R13	R14	R15
合計	6,511	6,374	6,434	6,494	6,555	6,615	6,676	6,737	6,798	6,859	6,920
製造業	3,600	3,482	3,533	3,584	3,635	3,686	3,736	3,787	3,838	3,889	3,940
建設業	1,561	1,558	1,573	1,589	1,605	1,621	1,637	1,653	1,670	1,687	1,703
電気･水道業	1,055	1,039	1,031	1,023	1,015	1,007	999	991	983	974	966
サービス業	189	191	192	194	196	198	200	202	203	205	207
その他	104	105	105	104	104	104	104	104	104	104	103
卸･小売業	25	25	25	24	24	24	24	24	24	24	23
医療･福祉	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24
学術･開発	20	21	21	22	22	22	23	23	23	23	24
宿泊･飲食	9	9	9	9	9	9	8	8	8	8	8
運輸業	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
教育･学習支援業	6	6	6	6	7	7	7	7	7	7	7
生活関連業	6	6	6	6	5	5	5	5	5	5	4
物品賃貸業	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
情報通信業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
複合サービス業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

図 3-2-1　業種別排出量の将来見込み



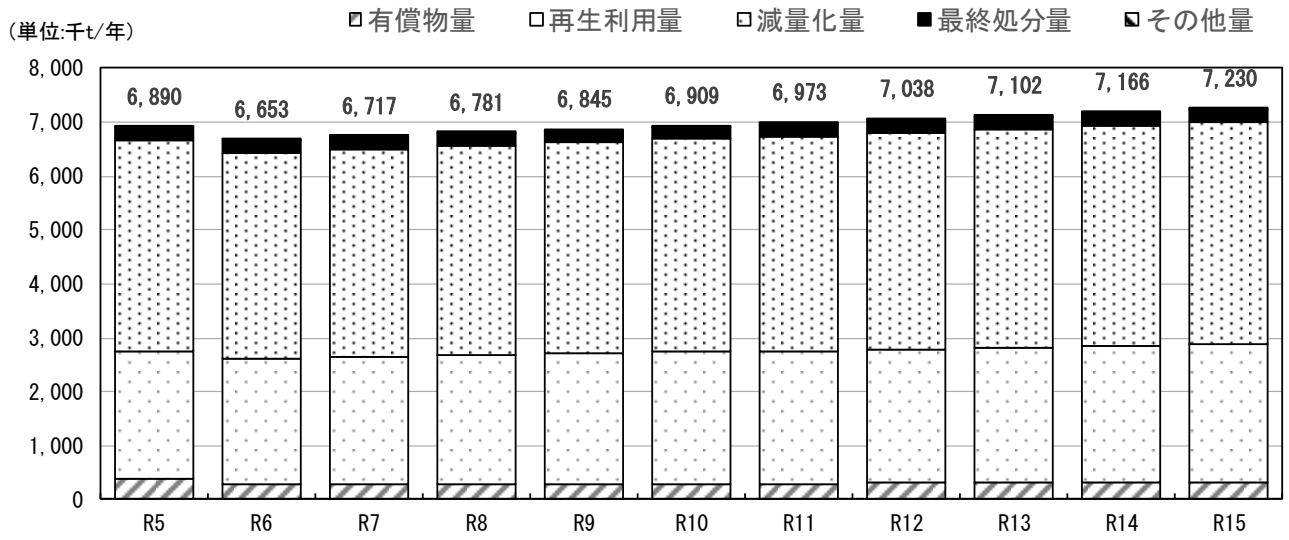
（単位：千t/年）

種類＼年度	R5	R6	R7	R8	R9	R10	R11	R12	R13	R14	R15
合計	6,511	6,374	6,434	6,494	6,555	6,615	6,676	6,737	6,798	6,859	6,920
汚泥	4,032	3,917	3,952	3,988	4,023	4,059	4,094	4,130	4,165	4,200	4,235
がれき類	1,278	1,275	1,288	1,300	1,313	1,326	1,339	1,352	1,366	1,379	1,393
ガラス陶磁器くず	285	291	294	297	299	302	305	308	311	314	316
廃プラスチック類	167	166	167	169	170	171	172	174	175	176	177
木くず	167	167	168	170	172	174	176	178	180	182	184
廃アルカリ	119	113	114	115	116	117	118	119	120	121	122
その他	463	445	450	455	461	466	471	476	481	487	492
廃酸	95	91	92	93	95	96	98	99	101	102	104
廃油	82	76	77	77	78	78	79	79	80	81	81
ばいじん	81	77	78	78	79	79	80	80	81	81	82
鉱さい	49	47	47	48	49	50	50	51	52	53	53
その他の産業廃棄物	44	43	44	44	44	44	45	45	45	45	45
動植物性残さ	41	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
金属くず	38	36	37	38	38	39	40	40	41	42	42
燃え殻	23	22	22	22	22	22	23	23	23	23	23
ゴムくず	5	4	5	5	5	5	5	5	5	5	5
紙くず	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
繊維くず	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
水銀使用製品	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
動物系固形不要物											

図 3-2-2　種類別排出量の将来見込み

２．処理量の将来予測

処理量の将来予測は、現状の業種別、種類別の排出量に対する処理方法等の割合が将来も一定であると仮定し、算出した。結果は図 3-2-3 のとおりである。



（単位：千t/年）

項目＼年度	R5	R6	R7	R8	R9	R10	R11	R12	R13	R14	R15
発生量	6,890	6,653	6,717	6,781	6,845	6,909	6,973	7,038	7,102	7,166	7,230
有償物量	379	280	283	287	290	294	297	301	304	307	311
排出量	6,511	6,374	6,434	6,494	6,555	6,615	6,676	6,737	6,798	6,859	6,920
再生利用量	2,367	2,346	2,370	2,394	2,418	2,442	2,466	2,491	2,515	2,540	2,564
減量化量	3,921	3,809	3,844	3,878	3,912	3,946	3,981	4,015	4,049	4,083	4,117
最終処分量	222	218	220	222	225	227	229	232	234	236	239
その他量	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

図 3-2-3　処理量の将来見込み